

鏡に写りし黒き竜騎士（リメイク版）

プロトタイプ・ゼロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神世紀を生きる普通の少年黒騎龍牙は、記憶に無いはずの懐かしい夢を見る。夢の内容がわからないものの、親友の二人と共に学校に行く。

自分にとってつまらない人生を過している時、自分以外の全ての時が凍るように止まる。何故自分だけなのか、意味がわからなくなった龍牙が鏡を見ると、樹海と呼ばれる世界でバーデックスと戦う友奈達を見て、自分も戦う決意をする

これは「結城友奈は勇者である」と「仮面ライダー龍騎」のクロスオーバー作品です。

多分誤字・脱字とか多いと思いますけど暖かい目で読んでくださると嬉しいです。

目次

第一話「始まりの時」	1
第二話「懐かしき夢」	19

第一話「始まりの時」

西暦2015年のどっかの季節頃。

「これからもずっと一緒にいようね！」

いつだったか、そんなことを言われた気がする。いつもニコニコして笑顔の眩しい赤髪の少女。いつも俺を引っ張っていくあの笑顔。

俺はあの笑顔を浮かべる少女が好きだった。あの子とずっと一緒に居たいと心から思っていた。頂点を意味する名を与えられたバーデックスが天から降ってくる前までは。

俺達は必死に逃げた。途中人間の醜さを思い知らされながらも、それでも一緒に生きるために逃げた。

少女は諦めなかった。生きる事を。醜い大人達を純粋な子供達を、より安全に逃げられるようにいつも努力していた。バーデックスからみんな逃げ切れるようにしていた。

相手がどんなに醜くても死んでしまったら誰よりも悲しんで、心中で自分に怒って……。

そして彼女は——■■■■は桜の■■■となった。

俺は、悲しそうな笑みを浮かべながらみんなを守る■■■を、ただ見ていることしか出来なかった。

それから数日が経ち、俺達は様々な神様が融合して壁を作ったという四国を目指していた。いや、違うな。正確には神樹様と呼ばれる神様のいる香川に向かっている。

途中途中で何人の人達を守りきれずにバーデックスに喰われてしまった。当然■■■は血相を変えて怒ってバーデックスを殴り飛ばしたけど。

俺は何もできなかった。彼女の力になることも、彼女の心を支えることも。何も出来なかった。

だから——

「諦めちゃダメだよ！絶対に助けるから！絶対にみんなで四国で暮らそうよー！」

涙を流しながら身体の半分を喰いちぎられてしまった俺を見る■
■を見て、本当に自分が嫌になる。

——ああ、■■を泣かせてしまった。

どうして俺は■■を安心させられないんだろうな。■■とは違って特別な力を持つてるわけじゃないけど、せめて■■の支えになるぐらいにはなりたかったよ。

本当に——悔いしか残らない人生になったな。

爺ちゃんも言っていたじゃないか！

「お前は悔いのないように生きろ」

ってさ。バーデックスに喰いちぎられたからって、簡単に死んでたまるかよ！人間ってのはア、諦めが凄く悪いんだよ！お前らのような自分勝手な神様に人間様が簡単に屈すると思うなよ！

そう心の中で叫びながら俺の意識は途絶えた。

——目覚めよ。その気高き荒ぶる魂！

「リュウクーん！早くしないと遅刻するよー」

朝食として白ご飯、味噌汁、目玉焼きを食べ終わって支度していた俺を呼ぶ声。その声を聞いて俺はもう来たのかと思った。

俺の名前は黒騎龍牙くろきりゆうがと言う。西暦時代から続く高貴なる家の現当主だ。元々は俺の親父が当主だったんだが、2年前の大橋大災害により他界してしまった。そのため、偶然家に居て命を失うこともなかった俺が当主となった。

黒騎家は乃木家・上里家・高嶋家・土居家・伊予島家・鷺尾家・赤嶺家・弥勒家ほど権力のある名家という訳ではないが、西暦時代に存

在したという勇者高嶋友奈と黒騎家当時の当主が仲良かったため、神世紀の今を生きる俺の家は権力が上がった。ただそれだけの事だ。

かつての勇者と仲がよかったと言うだけで権力が上がるなんて意味が不明すぎる。大赦の考えることは理解不能だよ。

「くだらない……本当に、くだらない」

勇者がなんだと言うのだ。かつて戦っていた勇者なんぞ俺には関係ないだろうに。なのに、なのに……。

「どうして、こんなにも心が悲しいんだろうな」

讃州中学の制服に着替え終わった俺は鏡で髪の毛を整えると、カバンを背負って家を出る。鏡の中で黒い龍が飛んでいくのに気づくこともなく。

くくくく

「遅いよ。もうちよつと早く出てきてくれないじゃん」

「いつもは友奈ちゃんの方が遅いでしょ？」

「うう、そうだけど……」

結城友奈、東郷美森、そして俺。いつも一緒にいるメンバーであるこの三人が揃って、仲良く学校に向かっていている途中、頬を膨らませた友奈に愚痴を言われる。

さつき東郷が言った通りいつもは友奈の方が出てくるのが遅くて俺が友奈を待つてから東郷を向かいに行くという構図なのだが、どうしてか今日は俺の方が遅かった。

東郷に注意されてしょんぼりしている友奈を見て苦笑いを浮かべながら頭を撫でる。友奈の髪はサラサラで撫で心地がいい。

ポニーテールにした赤い髪を見ているとどうしてか、俺の記憶になはずの女の子が浮かび出てくる。それがいつも不思議だった。

友奈は天真爛漫で笑顔の明るい女の子だ。誰に対しても優しく接する彼女に好意を抱く男子は多い。何度かラブレターを送られたり直接告られたりしているらしい。

そして東郷美森。友奈の大親友であり大和撫子を体現させたように見える。東郷は（友奈に関するものを除けば）いつも落ち着いていてお淑やかな女の子だ。

家事スキルの高い東郷は根っこからの日本大好きでよくぼた餅を作っては彼女達が属する勇者部に持ってきている。

友奈も勇者部のみんなも東郷の作るぼた餅が大好き。そんな俺も

ぼた餅が好きだが、正直あまり食べない方だ。喉に詰まらせたこともあるし。

友奈以上に学校で視線を集める彼女はラブレターを貰う頻度も告白される数も多い。

まあ、友奈も東郷も理由は知らないが全て断っているみたいだな。風から聞いたところによると「私には好きな人がいるので」らしい。

なるほど。二人とも好きな人がいたのか。知らなかった。

「はい。友奈ちゃん、ぼた餅よ」

「っ!!わーい!私、ぼた餅大好き!」

こんなにも仲良さげな雰囲気を見ていれば、告白を断るのも分かるけどな。

「どうしたのかしら?」

俺の視線に気づいた東郷が、一体どこから出したのか謎でしかないぼた餅を入れた箱を俺に向けてくる

言っておくが食べないからな?朝からぼた餅を食べるのは腹に重いから食べないからな?フリじゃねーぞ?

それを察した東郷が残念そうにぼた餅を片付ける。いやだからお前はどこから出してどこにしまってるだよ?

相変わらず謎だわ。

彼女達といっしょに居る時は俺はだいたい喋らない。別に無口とか無愛想とかではないんだ。後ろから突き刺さる恋愛煩惱でまみれた頭を持つ男子達の嫉妬の視線を避けるためだ。

ただえさえ幼馴染みと言うだけでイジメを受けているのに仲良く喋っているところを見られたらそれこそ何されるかわかったもんじゃない。

今の時代嫉妬によるイジメは別に珍しくもない。むしろ当たり前という学校が多い。あいにく讚州中学はそうだった事はないが、それでもただ幼馴染みと言うだけで虐められるのはなんか違う気がする。

ちなみに虐められている事に関しては誰にも相談もしていない。相談する事で虐められるの頻度も上がるし、友奈達に心配をかけてし

まう。

あとはそうだなあ、俺の見た目が陰キヤだからだろうか？確かにゲームは好きだし暇な時間はゲームしてるし、休みの日は家にいることは多い。

陰キヤだから虐めてもいいという考えを持つバカも多いがな。

「ねえねえ、龍くん!!今日は一緒に帰れる?」

突然友奈がそんな事を言ってくる。本当にやめてほしい。俺の後ろ見てみ?嫉妬の視線が殺意に変わったぜ?

「ダメよ友奈ちゃん。友奈ちゃんは今日依頼来てたでしょ?」

そう。友奈達が属する勇者部は世のため人のために活動する部活だ。人が足りたくなさそうなことを勇んでやる……言ってみればボランティア活動のようだけど、それでも依頼とあらば駆けつけるのが彼女ら勇者部だ。

讃州中学でも何度か依頼が来ることもあるらしいな。たまに生徒がするような事じゃない依頼も来るけど。

「そうでした!今日テニス部の依頼が来てたんだ!!」

いやあ、確かに運動神経いいと思うけど、なぜに素人に手伝ってもらおうと思ったテニス部よ。

まあ、それ程までに人手が足りないんだろ。うん。そうなんだろうな。それに、俺は勇者部というのをよく理解できてないし。

はあ……。今日も最悪な一日になりそうだな。

くくく

「……やっぱりな」

教室に着いた俺の一言目がこれなのは、まあ、そうだな。いつも通り机の上に置かれている花瓶が関係しているんだろうね。

花瓶には紙が貼ってあり、大きく赤い字で「死ね」と書かれている。教室の中でクスクスと笑い声が聞こえるあたり俺が来る時間を想定して置いたんだろう。本当に勤勉な奴らだよ。

机の上に置かれた花瓶を手に取り貼ってあった紙は捨てる。花瓶を元の場所に戻すと椅子に座ってカバンを机にかける。

ドガツ!

突然蹴られた。それも見るからに悪そうな風貌の不良に。

「おいおい。みんなからの愛の籠もったプレゼントを捨てるなよ？」

及川徹雄おいかわてつお。讚州市の中でもとびきり腕っ節のいい不良だ。成績自体も悪いわけでもなく運動神経も抜群、カリスマ性がありこの辺り一体を占める不良グループの長だ。

一度目をつけた奴を徹底的に虐め尽くすという意味わからん思考の持ち主だ。まあ、俺にとつてはそこまでの存在なのだが。

「あれれ〜?無視でしゅか〜?」

ただなんだろうな。物凄く腹の立つ奴なんだよ。

一回殴つて沈めたことあったけど、忘れてるんだろうねきつと。

「ちっ!面白くねえ奴……」

俺が全無視し続きたらどっか行つてくれたよ。これで安心安心……出来るかあ!

「よーし、ホームルーム始めるぞー」

………最悪の一日、乗り越えろとするか。

所で、話は変わるんだが。

勇者という存在があるだろう?西暦の時代にいたという五人・の勇者。どうしてか俺は五人だと認識している。

でも、世間で知られている勇者の人数は四人・なんだ。おかしいよな。そして正確に言えば、西暦の時代に存在していた人数は八人：なんだよ。じゃあ、そのうち四人の勇者はどうして名前が残っていないのか?

それが俺が考えている一番の謎なんだよ。

そうそう。謎と言えば……

「時が、止まっている?」

突然全ての時が止まった今のこの時間さ……謎だと思わないか?人も時計も空も全ての時が止まっている。今この教室で動いているのは俺だけだ。

そう言えば、以前大赦に行った時に勇者がどうのこうのって言つて

}\n}\n}\n}

讚州中学2年の結城友奈は、昨日犬吠埼風から課題として出された文化祭の出し物を考えていた。その途中、授業中に突然東郷と共に手持ちのスマホが鳴り響き時が止まったあと、光に飲まれて樹海の中に来てしまった。

東郷と共に樹海の中に来てしまった友奈は樹と風の二人と合流し、襲ってきた乙女座の白い怪物——ヴァルゴ・バーデックスと戦っていた。

風は後輩を巻きこんだ事に対する罪悪感と責任感から。

樹は尊敬する姉と共に歩むために。

友奈は死に対して恐怖する親友と世界を守るために。

みんながみんな、理由は違えど勇気を持って花をイメージされた勇者となる。

「勇者……ペアアアアアアアアアンチッ！」

友奈の振り下げたパンチが桜の光を纏ってヴァルゴ・バーデックスの身体を抉る。だが直ぐに再生される。

内心舌打ちしながら風達の元に戻る。

「くっ……殴っても殴ってもすぐに再生してしまいます!!」

「面倒ねえ……どうしよつか?」

大剣を担いだ風がヴァルゴ・バーデックスを睨みつける。

ヴァルゴ・バーデックスは勇者二人を相手にするのが面倒になったのか、急に向きを変える。その方向には……

「と、東郷さん!!」

友奈の親友である東郷美森が車椅子に座っていた。地面が全て樹木で囲まれているため車椅子で動くには限界がある。

だからこそ上手いように動けない東郷がヴァルゴ・バーデックスに

狙われた。ヴァルゴ・バーデックスの吐き出した卵のような爆弾が、東郷の周りに被弾する。

「きゃあああ!!」

「東郷さんっ!!(っ)、このっ!!」

東郷の悲鳴を聞いて表情に怒りを浮かべた友奈がすぐさまヴァルゴ・バーデックスに向かって跳ぶ。

「勇者……パアアアアアアアアアアアンチツ!!」

思いっきり力の込めた勇者パンチがヴァルゴ・バーデックスの体を大きく抉りとる。

その直後、どこからか飛んできた光弾によって友奈は突然吹き飛んだ。

「友奈!?!」

「友奈さん!!」

吹き飛んだ友奈は樹木の下に落ちる。それを見て慌てた風が友奈を追う。

ヴァルゴ・バーデックスは抉った箇所を直即で再生させると、一発二発と爆弾を炊き出していく。

「ひっ!いやっ……!!」

恐怖で思わず手に握っていたスマホを前に掲げる。すると、

『ギヤアアンオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

『はあああああああああつ!』

スマホの中から黒い龍と共に黒い鎧騎士がヴァルゴ・バーデックスに向かって飛び蹴りする。急の展開に対処できなかったヴァルゴ・バーデックスはそのまま地面に倒れる。

なお、東郷に向かって放たれていた爆弾は黒い龍が吐いた黒炎によつて爆殺している。

『大丈夫か?』

黒い龍を従えるように歩いてきた騎士は東郷に怪我ないかを確認する。

「え、ええ。ええつと貴方は?」

『……リュウガだ。仮面ライダーリュウガ。それが、俺の名だ

リュウガと名乗った騎士はヴァルゴ・バーデックスが起き上がったのを見て、東郷に背を向ける。

『安心しろ。お前に怪我なんざ負わさない。俺が絶対に守る』

黒き影の如し騎士リュウガは暗黒龍ドラグブラッカーと共に、友のために立ち上がる。

C o n t i n u e t o n e x t t i m e !

第二話 「懐かしき夢」

突如東郷を守るように現れた黒い騎士リュウガ。その周りをグルグルと飛ぶ暗黒龍ドラグブラツカー。

リュウガは起き上がったヴァルゴ・バーデックスを睨みつけながら黒いドラグセイバーを召喚する。

(どうして今黒騎君に似ていると思ったのかしら)

ドラグセイバーを右手で構えるリュウガを見て、東郷はその背中を知っている人物と重ねる。

『東郷達を傷つけたのはお前だな？ならば生かしておけないな』

(どうして私の名を?)

樹木を蹴りつけて大きく跳んだりリュウガはすれ違い様にヴァルゴ・バーデックスを斬りつける。その後追ってきたドラグブラツカーに乗り、もう一度ヴァルゴ・バーデックスを斬る。返す刀で何度も斬りつけていく。

地面に降り立ったりリュウガは、カードを取り出すと左腕につけられた暗黒龍召機甲ブラツクドラグバイザーに装填する。

《ファイナルベント》

ドラグブラツカーがリュウガの周りに来ると、共に空へ飛びそのままヴァルゴ・バーデックスに向かって蹴りを放つ。その際にドラグブラツカーがリュウガに向かって黒い炎を吐き、リュウガはその黒炎を足を纏う。

——ドラゴンライダーキック

リュウガの黒炎を纏った蹴りが炸裂し、ヴァルゴ・バーデックスは悲鳴をあげる暇もなく爆発した。

その直後に無事着地したリュウガは樹木の下で友奈が気絶しているのを見て、慌てたように駆け寄った。

一連の流れをただ見ているだけだった勇者メンバーは眼をぱちくりさせた。

『無事でよかった』

友奈をお姫様抱っこ近寄ってきたリュウガは東郷の近くで降ろす

と、その場を立ち去ろうとする。だが、それよりも早く風が大剣を突きつけた。

「ちよ〜つと待ってもらわよ。アンタが何者かわからないからね」
『……………』

面倒なことになった——それがリュウガの考えだった。風の様子から逃げ切れるとは思わないが、頭に流れてきた情報である樹海が解けるのを待っていられるほど時間もない。

樹海の中はある意味現実世界であるためリュウガが鏡の世界から出てこれる時間も限られている。急いで鏡の世界に帰らないといけないリュウガによって目の前で仁王立ちする風は物凄く邪魔な存在だった。

それに、既にリュウガの身体が崩れ始めていることも関係している。

「黙ってるところ悪いけど、アンタの事を大赦に報告しないとイケないのよ。だから潔く教えてくれるかしら？」

『…………お前らと仲良しこよしする気はない』

「逃がしません！」

ドラグブラツカーの背に乗り空へかける。樹が両手のワイヤーを伸ばすが、それよりも早く樹海の中に存在する不自然な鏡を見つけてその中に潜る。

くくく

とっさの事だったから思わず何も考えずに飛び込んだけど、どうやら無事に現実世界に帰ってこれたようだ

「ぐはあっ!？」

飛び込んだ先がどつかのゴミ溜まり場でなければ、な。

なんでゴミ溜まり場なんだよ!?!あとでシャワー浴びなくちやいけないだろうが!!まだ学校の授業残ってたぞこんちくしょうめが!

「はあ……再つ悪な気分だよ」

立ち上がって服についたゴミを払い落とすと、取り敢えず家に向かう。ここからなら真つ直ぐ学校に向かうよりも家に帰ってシャワー浴びた方が早い。

先程の戦いでリュウガの使い方も分かったし、多分だけどこれからも戦いは続くだろう。なら、俺は戦うだけだ。

家に着いた俺はゴミの匂いを流すためにシャワーを浴びる。溜まり場に捨てられていたゴミは何日経った奴だよ……シャワー何回も浴びちやったよ。

はあ……なんかもう今更学校行くのもあれだし、今日はもうサボるか。

何故か物凄くムシヤクシヤして、何も食べずにベッドに寝転がった俺はそのまま眠りについた。

『やって来ました大阪!!ほらほら龍くん』

赤い髪をポニーテールにした明るい少女が俺の手を引く。少女の顔はどこか懐かしくて愛おしい。なのに何故か物凄く泣きたくなってくる。

『ねえねえ！見て見て！噴水だよ！』

この時はまだバーデックス共が来てなかった時なのか？というか大阪って俺来たことないんだけど……なんでだろう？凄く懐かしい。『もう、龍くんどうしたの？アイス食べる？』

少女が食べていたソフトクリームを俺に向ける。いややめなさいよ。それ関節キスっていうんだよ？

『大丈夫！だって龍くんは将来の旦那様だもん！』

どこか大丈夫なんだろうか？

まあ、くれるって言うなら食べないわけにもいかないよね。そう思っただけで出されたソフトクリームを一口食べる。

ふむ。これがキスの味か。

『ななななななな、何言ってるの!?もう！恥ずかしいよお……』

顔を真っ赤に染めた少女が顔を隠すように背ける。その表情が可愛くて愛しくてもう仕方ない。

『ずっと一緒にいような』

『……っ!!うん！約束だよ！』

嬉しそうに椅子から立ち上がった少女がニコツと笑う。俺も苦笑いしながら椅子から立ち上がると……

突然バーデックスに姿を変えた少女よって、身体の半分を喰いちぎられた。

俺は友奈に恋をしている。どうしてからわからない。でも気づいた頃には恋していたと思う。

でも俺は……この気持ちを伝える気はない。

俺には友奈のそばにいる資格はない。本当にどうしてかわかんないけど資格がないんだ。でも、東郷にはその資格がある。

友奈が一番笑顔でいられるのは東郷の隣だけだからな。そう。だからそれでいいんだ。

……また時が止まっている。どうやらまた樹海が始まっているようだ。

なら仕方ないか。

すぐさま風呂場に向かい鏡にカードデツキをかざす。すると、鏡からVバックルが現れ俺の腰に装着される。

「……変身」

Vバックルにカードデツキを入れることで黒い影が俺に重なり、姿が黒い竜騎士リユウガに変わる。

「……やるか」

そう呟いて、俺は鏡の中に飛び込んだ。

さて、一応連戦になるけど頑張るとするか。

くくく

放課後になり勇者部部长である犬吠埼風から説明を受けた友奈達。その中で唯一変身出来なかった東郷美森は、自分の不甲斐なさを風に八つ当たりしてしまい部室から逃げ出した。

そしてその親友の友奈が美森を追いかけ、励ましている最中に2回目目の戦いが始まった。

すぐに風達と合流した友奈は、結界に現れたバーテックスを見る。今回はスコープオン・バーテックス、キャンサー・バーテックス、サジタリウス・バーテックスと三体出現した。

「はああああああああ!!勇者パアアンチ!」

美森が安全そうな場所に隠れたのを確認した友奈が勢いよく飛び出して、スコープオン・バーテックスに向かって拳を振り下ろす。

だが、すぐにスコープオン・バーテックスと友奈の間に来たキャンサー・バーテックスの甲羅によってその拳は遮られる。

「か、硬い!!」

予想外の硬さに友奈は右手を痛め顔を顰める。

その隙を、バーテックスは見逃さない。キャンサー・バーテックスの後ろから伸びてきたスコープオン・バーテックスの尾が伸び、友奈の横腹に当たって吹き飛ばす。

突然のことに反応できなかつた友奈は樹海に落ちてしまい、そのまま気を失ってしまった。

「友奈ちゃんっ!?!」

吹き飛んだ友奈を見て美森が駆け寄ろうとする。だが、無防備な人間を放っておくほどバーテックスは優しくない。

「東郷!!逃げなさい!」

遠くから風の必死な声が聞こえる。もうすぐそこまでスコープオン・バーテックスの尾が迫っていた。

(いや……こんな所で死にたくない!!)

思わずスマホを前に向けて目を瞑る。だが、いつまで経っても痛みはやってこない。

恐る恐る瞑っていた目を開く。そして、

「……えっ?」

黒い竜騎士……仮面ライダーリュウガが大きな盾を持ってスコールピオン・バーテックスの尾から美森を庇っていた。

「一度ならず二度までも……そこまで命が惜しくないようだな」

声の感じからリュウガが怒っている事が分かる。

(また、助けてくれた……?)

助けてくれたリュウガの背中を見て、妙な安心感が胸から上がってくるのを感じる美森だった。

(私も戦わなくちゃ……友奈ちゃん達にだけ戦わせる訳には行かない!!)

リュウガに守ってもらったことにより、先程まで迫っていた恐怖が消え、勇者となる覚悟が決まる。美森はスマホをタップし、青く光る朝顔を身に纏った。

青を基調とした勇者服は、動かせない足をカバーするかのようだが伸びていており身体を支えている。手にはライフルのような武器を握っていた。

リュウガはその様子を見て一度頷くとすぐに敵を見据える。

くくリュウガくく

面倒くさいな。前は一体だったから簡単に倒せたけど、今回は三
体もバーテックスが存在している。

見たところ蠍座型と射手座型、そして蟹座型か。なんか星座みたい
な見た目だな。まあ、どうでもいいけどさ。ようは倒せばいいんだか
ら。

『ギヤオオオオオオオン!!』

バーテックスの方向を身体を向けた俺は射手型が放ってきた光の
矢?を掴むと、そのまま投げ返す。

俺はVバックルから一枚のカードを取り出す。そしてそれを暗黒
龍召機甲ブラックドラグバイザーにセットする。

《ソードベント》

そんな機械音が聞こえた後、突然空から一振りの黒い剣ドラグセイ
バーが飛んでくる。ドラグセイバーの柄を掴み構えると、ドラグブ
ラッカーの背に乗りバーテックスに向かって飛ぶ。

『ギヤオオオオオオオオオオオン!!』

ドラグブラッカーが黒い炎を吐き出し、射手座バーテックスを牽制
する。俺は射手座よろしくバーテックスが動けない隙をつき、蟹座
バーテックスの背に飛び乗った。そして俺はそのままドラグセイ
バーを何度も何度も突き刺す。

だが、蟹座バーテックスの装甲は思った以上に硬く、ヒビ一つ入ら

ない。

蟹座は背中をドラグセイバーで斬りつけられているというのに、まるで蚊に刺された程度に思っているのかそのまま勇者達に向かって直進していく。

(クソが……硬すぎんだよ！)

《ストライクベント》

カードデッキからカードを一枚引き抜き暗黒龍召機甲ブラツクドラグバイザーにセットすると、俺の右手にドラグクローを召喚する。

ドラグクローを装備したことにより俺の右パンチ力が上昇した。俺は右手に召喚したドラグクローを使い、今も尚移動している蟹座の背中目掛けてドラグクローを振り下ろす。すると、強化されたパンチにより蟹座の甲羅にヒビが入り、拳二つは入れられる穴が空いた。

(これで決める)

そのままドラグクローを甲羅の穴に突っ込ませると、ドラグクローを装備した時の必殺技であるドラグクローファイヤーを浴びせる。その動作に合わせてドラグブラツカーが黒炎を射手座に浴びせる。

防御の硬い敵によるあることだが、外側がいくら硬くとも内側が弱い。それを狙った攻撃により蟹座は内側で溢れ出す炎により爆発する。

俺は爆発に巻き込まれる前にその場から跳び、ドラグブラツカーの背に乗る。あとは蠍座だけだ。

「……行くぞ、ドラグブラツカー」

《ファイナルベント》

ドラグブラツカーの背から跳び、一度身体を回転させると蠍座に向かってライダーキックを繰り出す。その際にドラグブラツカーが黒炎を吐き、俺の足に纏う。

——ドラゴンライダーキック!!

「国防主義!!」

その時、地面に伏せた東郷がライフルのような武器から銃弾と言っているのかわからない銃弾を撃っていた。相変わらずの国防主義のようだけどな。

俺とドラグブラツカーの力を合わせたライダーキック……そして東郷の国防奥義を受けた蠍座はその攻撃に耐えきれず消滅していく。地面に着地し、消滅する様を見た俺は密かにその場を離れようと踵を返す。だが、

「前回は逃げられたけど、今回も逃すわけにはいかないわよ！」

突然大剣を振り下ろしてきた風によって邪魔された。

「アンタが東郷を守ってくれたことには感謝してるわ。けどね、アンタみたいな怪しいヤツをそのままにしておく訳にも行かないわけよ」

大剣を担いだ風は油断することなく俺を睨む。さてさて、少し困ったことになったな。風の傍では樹があわあわとしていて、いつの間にか復活してる友奈は東郷のそばに居る。そして東郷は俺に助けられた事ので強く出れない。

………まあ、逃げようと思ったくらいでも逃げられるけどさ。面倒くさいな。

ドラグブラツカーは樹を警戒しているから逃げようにも逃げられない。背中にさえ乗ればあとはこの結界内のどこかにある鏡に入れば変身解除できる。

仕方ないな。

「おっ？まさか一緒に来る気になったのかしら？」

なぜか風が嬉しそうにしているが、残念ながら違う。

《ソードベント》

蟹座の背を斬りつけた際に弾かれて飛んでいったドラグセイバーを呼び寄せる。場所的に風の背中を狙う形になってしまいが、まあ仕方ないだろう。

「うわあ!!あつぶないわねー!!」

「お姉ちゃん大丈夫!？」

「風先輩!!」

そのまま飛んできたドラグセイバーを掴むとどこから攻撃されても対処できるように構える。

さあ、逃げるために戦うとするか。